

特別寄稿

「文化」と「環境」の螺旋的展開

早稲田大学人間科学学術院教授／東京大学名誉教授 井上 真

筒井迪夫氏による森林「文化」論の創生

私は大学3年生の時（1980年頃）に受講した故・筒井迪夫氏の講義内容に興味を持ち、林政学研究室を選んで卒業論文を書いた^(注1)。

1970年代には「林政学は経済政策学の一分野」というのが学会の定説だった。しかし、当時の森林を取り巻く状況は、もはや収益第一主義に立った林政学の体系・理論では説明することのできない窮地に追い込まれていた。そこで、筒井氏は、人間を自然から切り離し、自然と闘い、自然を支配することではなく、自然の尊さを畏れ、敬い、自然の厳しさを体しその摂理を護り、自然の温かさに溶け込むことを「森林文化」として概念づけ、これを新しい林政学理論の基礎と位置づけた^(注2)。そして、経済性と公益性という森林の持つ二つの機能を等価値のものとし、それを両立することが林政の役割であるという考えから、生産と保全とを二つの焦点とする二焦点林政（楢田林政）を提唱した^(注3)。

こうした林政論の基礎には、筒井氏の地道な入会研究^{いりあい}がある。森林利用の歴史を調べ、現代に適合する森林利用のあり方を明らかにすることを目的とし、古くからの入会に対して山村文化の視点から取り組んだのであった。日本の自然を代表するのは山河と草木であり、太古の昔から多くの文化が森林と人間との交流の中から生まれてきた。このような自然と人間との一体的な関係を現代に適合した形で創り上げる必要がある^(注4)との考えから、「山と木

と人の融合」の理念を基礎とする森林文化社会を構想したのだった^(注5)。

今の私の専門は環境社会学であり、文化人類学ともかなり近い領域で研究を進めている。その立場から「文化」について若干コメントしておきたい。「文化」概念は大雑把に言うと19世紀から20世紀はじめにかけて、単数形で大文字の「文化」(Culture)から複数形で小文字の「文化」(cultures)へと変化した^(注6)。前者はすべての人間が共有していて段階的に進歩し洗練されていくと想定されるもので、いわゆる「文明」と互換的に使用された。人間を文化的な存在として理解する際の文化「一般」のことである。これに対して、後者は地域・民族によって多様でありそれぞれに価値がある個別の文化を指す。筒井氏が考えていた「文化」は、明らかに個別の文化を想定した後者であろう。ただ、文化人類学者が注目してきた目に見えるものの背景にある普段あまり意識していない行動パターンや意味付け、すなわち「一定程度人々に共有されているふるまいや考え方のまとまり」という意味での「文化」^(注7)の概念そのものではない。

森林文化研究会

上に述べたような筒井氏と同様な問題意識を持った十数人が朝日新聞社に集って研究会を発足させ、それがもととなって朝日新聞創刊100周年を記念して1978年9月に「森林文化協会」が設立された^(注8)。そのシンクタンクとして設置されたのが「森林文化研究会」で、研究年報「森林文化研究」を発行した^(注9)。

創刊号の冒頭で当時の森林文化協会理事長・渡辺誠毅氏は、研究年報の趣旨について次のように書いている^(注10)。「森林は日本人の生活文化の母胎であった、といっても過言ではないと思います。ところが最近になって、この森林の存在が見失われそうな危惧が出てきました。経済生活の発展と自然の崩壊という矛盾した二つの面が、不気味な不協和音をきしませております。こうした現実の中で、私たちは、より豊かな未来をつくるために、森林の意義の見直しを志向して森林文化協会をつくりました。この運動が実りのある真の文化運動に発展してゆくには、自然(森林)と人間との一体化という理念に基づいた学術研究によって裏打ちされなければなりません。ここに「森

「林文化研究」を発刊いたすことになりましたのも、そうした趣旨によるものであります。」

同じ創刊号の編集後記で座長であった筒井氏も研究年報のねらいを次のように説明している^(注11)。「森林文化に関する研究は、ひとり林業技術の側面のみではなく、森林と人間との交流の中から生まれた法制度、経済組織、社会関係などはもとより、文芸、民俗など広範囲な文化事象が研究対象となることは言うまでもなく、また、研究対象の地域的範囲も日本のみならず地球全体に広がるものである。太古から現在、未来へとつながる「時間系列」と、全世界にわたる「空間系列」の交錯の上に位置する森林の文化的意味を問うことによって、森林文化の本質にすこしでも迫りうれば幸いである。」



「鯖の道周辺森林文化研究」のため京都・滋賀を訪れた際の写真（1998年11月）
メンバーは東京大学林政学研究室の関係者が中心だった（括弧内は当時の所属）。後列左から海老沢秀夫氏（森林文化協会）、永田信氏（東京大学教授）、三井昭二氏（三重大学教授）、大橋邦夫氏（東京大学教授）、前列左から福島康記氏（林業経済研究所理事長）、笠原六郎氏（三重大学名誉教授）、筒井迪夫氏（多摩美術大学教授）、井上真（東京大学助教授）

そして、15年間座長を務めた筒井氏は70歳を迎えることを契機に1994年に退任した^(注12)。その後、森林文化協会の臨時理事・評議員会において、財務的理由などによって『森林文化研究』は第23巻(2002年12月)をもって打ち切りとなった^(注13)。

私は、筒井氏から声をかけられて何回か非公式に研究会に参加した。このほか、1998年から2001年までの4年間実施された「鯖の道周辺森林文化研究」メンバー10人の一人として森林文化研究会の活動に参加した^(注14)。

森林「環境」への視野拡大

「森林文化研究会」は2003年に改組された。メンバーが一新され、文化・環境に主軸を置く「森林環境研究会」に生まれかわり^(注15)、創刊号『森林環境2004』が刊行された。座長の佐々木恵彦氏(当時・日本大学副総長、東京大学名誉教授)が最年長で、私が最年少(43歳)だった。

ここで、「文化」に加えて「環境」を重視するばかりではなく、研究会の名称も「文化」から「環境」に代わった。私は協会の理事会・評議員会で当時どんな議論がなされたのか知る由もないので、あくまでも私なりにその意味を考えてみた。「環境」は人間を取り巻く「自然環境」と、社会制度や文化を含む「社会環境」の両面を含むというのが一般的な理解である。個別の文化はローカルな自然と人間との関わりがベースとなっているので、もともと「文化」概念には自然環境と社会環境の両方が含まれている。そのようなローカルで個別の文化や環境の重要性を認識しつつ、人類の滅亡に直結するよう地球規模の環境問題に「科学的事実」をも武器として活用して対峙する必要性を表明したのが「森林環境研究会」の名称だったのではないかと推測している。

森林環境研究会の活動

佐々木氏の専門は造林学であり、地球環境保全のためには、従来のような経済林造成だけでは不十分で、荒廃地の修復も含む環境林造成が必要であることを提唱していた。そして、特に熱帯地域の森林再生技術の開発研究が評

銜され、座長退任の翌年(2006年)に日本学士院エジンバラ公賞を受賞した。この3年間の特集テーマと責任編集者は次のとおりである。

- ・2004：日本の森林と温暖化防止（竹内敬二、松下和夫）
- ・2005：1 地域再生と森林の力、2 温暖化防止『京都議定書』の発効（桜井尚武、村田泰夫）
- ・2006：世界の森林はいま一苦悩と希望の緑（井上真、鷲谷いづみ）

2006年からは、やはり造林学が専門の桜井尚武氏（当時・日本大学教授、現森林文化協会理事）が座長を引き継いだ。桜井氏を座長とする9年間の特集テーマと責任編集者は次のとおりである。

- ・2007：動物反乱と森の崩壊（安田喜憲、森本幸裕）
- ・2008：草と木のバイオマス（有馬孝礼、辻陽明）
- ・2009：生物多様性の日本（福山研二、安田喜憲）
- ・2010：生物多様性 COP10 へ（森本幸裕、竹内敬二）
- ・2011：国際森林年 森の明日を考える 12章（桜井尚武、松下和夫）
- ・2012：震災復興と森林（有馬孝礼、竹内敬二）
- ・2013：地域資源の活かし方一人・自然・ローカルコモンズ（松下和夫、井上真）
- ・2014：森と歩む日本再生（竹内敬二、森本幸裕）
- ・2015：進行する気候変動と森林—私たちはどう適応するか（松下和夫、福山研二）

そして、2015年には「森林環境研究会」のメンバーが一新され、最年長（当時55歳）の私が座長に任命された。その後の10年間の特集テーマと責任編集者は次のとおりである。

- ・2016：震災後5年の森・地域を考える（一ノ瀬友博、鎌田磨人）
- ・2017：森のめぐみと生物文化多様性（田中俊徳、酒井章子）
- ・2018：農山村のお金の巡りを良くする（田中伸彦、伊藤智章）
- ・2019：森林環境 多事争論（井上真、桑山朗人）
- ・2020：暮らしの中の熱帯（原田一宏、井上真）
- ・2021：森林と自然エネルギーを再考する（村山知博、青木謙治）
- ・2022：森とともにどう生きてきたか（則定真利子、鎌田磨人）
- ・2023：激甚化する自然災害と森林環境（一ノ瀬友博、黒沢大陸）

- ・2024：人新世の生物多様性（田中俊徳、酒井章子）
- ・2025：野生動物と人間（原田一宏、井上真）

森林環境研究会では、毎年7月の研究会で特集テーマと執筆者について自由に意見を出し合うブレインストーミングを実施した。メンバーの専門領域は異なるため、様々なアイデアが出され、それが膨らんでゆく様子を舵取りしながら楽しませていただいた。12月の研究会では、特集テーマを一つに絞り込み、章立てと執筆候補者の大枠を固めた。意見が食い違って紛糾することはなく、自然と良い方向に収斂するのが常だった。そして、翌年3月の研究会ですべてを確定し、執筆依頼を出した。上記の特集テーマをみると、その時々で社会的に問題になっていたり注目されていたりすることが取り上げられてきたことがわかる。

この間、『森林環境』の刊行形態は何回か変化してきた。2004年版は編著が森林文化協会が発行は築地書館、2005年版以降は編著が森林環境研究会が発行は森林文化協会となった。ただ、途中の2019年版から2022年版の4年間は森林文化協会発行の月刊誌『グリーンパワー』の特集としてまずは掲載し、それを年度末にまとめて冊子とした。このような推移の中で、書店での販売からウェブサイトへの掲載とオンデマンド印刷（Print on Demand: POD）へと移行し、2015年版からはウェブサイトで章ごとにダウンロードできるようになった。このように、森林文化協会や森林環境研究会の担当者の方々の工夫によって刊行の形態は順次変化して現在に至っているのである。

二分法の超克を

森林環境研究会の発足時から数えると22年間、その前の森林文化研究会への非公式参加と鯖の道周辺森林文化研究の活動も含めると26年ほどこの研究会に関わってきたことになる。こんなに長く一つの組織に関わることになるとは思ってもいなかった。一人の人間があまり長く関わるよりも新陳代謝を図る方が活性化するだろうと判断し、私から申し出て退任となった。研究会メンバーの皆さんとの議論はいつも楽しいものだった。現場の人々の暮らしに根ざすという筒井氏の森林「文化」研究会の礎は、自然科学と社会科

学の幅広い分野のメンバーが集う森林「環境」研究会によって受け継がれ、視野が拡大され、そして状況変化に対応して常に再生されてきたと思う。

一点だけコメントを残すとするなら、人文学や社会科学の分野での議論を心に留めておく必要があることだ。元来は自然の一部である人間が、自然を対象化（客体化）し、人間と自然との関係において「主体－客体」関係を形成した。こうした二分法（二項対立）－自然 vs. 文化／科学的事実 vs. 文化的信念－によって近代は成立し、そこから資本主義が発展した。そのため、資本主義が引き起こす環境問題などの諸問題を乗り越えようとするなら、私たちは二分法を乗り越える新しい世界観ないしは「自然－人間」関係を構想し実社会で実現することが必要であろう。

その一端については、「関係的世界（関係的存在論に基づく世界観）」として拙稿^(註16)で論じたが、「多元世界 (pluriverse)」という用語で表すこともできる。多元世界は、「多くの世界が収まる一つの世界」^(註17)のことである。これは、人間、非人間、自然（動物、植物）、死者（霊）などが共存し、それぞれが影響し合って世界を多元的に構成しているという世界観を示すものである。こうした近代の二分法を乗り越えるオルターナティブな世界観を私たちは頭では理解することができるだろう。そして、それを実社会で実現するには多くの壁を乗り越える必要があることも想定内である。

その中で、最大の壁は、たぶん「科学的事実 vs. 文化的信念」をどのように扱ったらよいのかという問題であろう。人類学存在論的転回で論じられてきたように、ローカルな文化的信念（例えば何らかの迷信など）を文化相対主義的に尊重したとしても、科学的に証明できないものはあくまでもその人々がそう信じていることを否定しないだけであり、「科学的事実 vs. 文化的信念」の非対称性は揺るがない。つまり、迷信だと切り捨てることはしないが、正しいのはあくまでも科学的事実なのだという認識である。しかし、これでは関係的世界や多元世界のメンバーのなかで科学的事実を最大限重視しながら生きている人間の集団が特権的な地位に座り続けることになる。

この問題をどのように超克するのは今後の人類の行く末に大きな影響を与えるような気がする。森林「環境」を考える際にも、筒井氏が示したような森林「文化」がそれぞれの地域でどのような「関係性」のなかで「存在」しているのかを考察すること（＝関係的存在論）が重要であり、実はこの知

的営みがブレイクスルーの鍵を握るのではないだろうか。森林環境研究会における文化と環境は、螺旋的転回の二巡目にさしかかっているとと言える。

私は、2025年6月に森林文化協会の評議員に任命された。今後も別の形で関わることができるのはありがたい限りである。新しい座長となった田中伸彦氏（東海大学教授、専門：観光学）と研究会メンバーの皆さんのご健闘を祈りつつ見守らせていただきたい。

注：

- (1) 私には恩師が3人いる。学部卒で林業試験場の研究員になった私を鍛え、熱帯林地域への研究に導いてくれた当時の上司・熊崎実氏（筑波大学名誉教授）、東京大学林政学研究室での卒業研究からお世話になり後に博士号の主査をしていただいた故・福島康記氏、そして筒井迪夫氏である。井上真ノンドン・イマン、2024『アポ・カンヤから東京へー日本人と出会ったケニア・ダヤック人の冒険』春風社、100-101ページおよび146ページ
- (2) 筒井迪夫、1995『森林文化への道（朝日選書529）』朝日新聞社、74-75ページ
- (3) 筒井迪夫、1985『緑と文明の構図（UP選書236）』東京大学出版会、69-74ページ
- (4) 筒井迪夫、1982『山と木と日本人—林業事始（朝日選書219）』朝日新聞社、10ページ
- (5) 私の学生時代に受講した講義「林政学」で、筒井氏は「入会は林政の母である」と言っていた。「入会」はそこで生活する人たちが一定の決まりに従って、みんなで資源をうまく使っていく仕組みである。筒井氏は、古文書などに基づく入会研究から「山と木と人の融合」（森林文化）の重要性に気づき、それが林政学の基盤であることを私たち学生に伝えたかったのだと理解している。なお、自身の研究についての回顧録は次の通りである。筒井迪夫、1996「2 林業経済研究から森林文化研究へ—林政学徒としての私の歩み（シリーズ 戦後林業経済学の回想）」『林業経済』49(2):25-32
- (6) 里見龍樹、2024『入門講義 現代人類学の冒険（平凡社新書1071）』平凡社、106-107ページ
- (7) 箕曲在弘、2024「東南アジアを通してみる文化人類学の世界」箕曲在弘・二文字屋脩・吉田ゆか子（編）『東南アジアで学ぶ文化人類学』昭和堂、1-16ページ
- (8) 筒井迪夫、1980『現代森林考』日本林業技術協会、132-133ページ
- (9) 『森林文化研究』は創刊号（1980.6）から23巻（2002.12）まで発行された。
- (10) 渡辺誠毅、1980「研究年報『森林文化研究』の刊行にあたって」『森林文化研究』1(1)
- (11) 筒井迪夫、1980「編集後記に代えて」『森林文化研究』1(1):8
- (12) 筒井迪夫、1994「編集後記」『森林文化研究』15:244
- (13) 濱谷稔夫、2002「『森林の価値』論に代えて（編集後記）」『森林文化研究』23:186-188
- (14) 筒井迪夫、2001「〔附〕 鯖の道周辺森林文化研究について」『森林文化研究』22:123-124
- (15) 中野晴文・佐々木恵彦、2004「あとがき」森林文化協会（編）『森林環境2004（創刊号）』築地書館、199ページ
- (16) 井上真「終章『関係の世界』における野生動物と人間」森林環境研究会（編著）／原田一宏・井上真（責任編集）『森林環境2025—特集 野生動物と人間』森林文化協会、115-125ページ
- (17) エスコバル、アルトゥーロ／水野大二郎・水内智英・森田敦郎・神崎隼人（監訳）、2024『多元世界に向けたデザイン—ラディカルな相互依存性、自治と自律、そして複数の世界をつくること』BNN、24ページ